

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：13401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22183

研究課題名（和文）保育集団内の幼児間の同調性の生成機序：集団文化性と幼児の言動様式の関連から

研究課題名（英文）Developmental mechanism of conformity among early children in their groups:
Focusing on the relationships between Japanese groupism and the style of early children's behaviors

研究代表者

宮本 雄太（Miyamoto, Yuta）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・講師

研究者番号：50883097

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：幼児の保育集団内に生じる同調性の生成機序を検討するために、5園の3-5歳児21クラスへの観察調査と保育者等への聞き取り調査を実施した。結果、幼児の同調関係を示す特徴として、幼児なりの多様なルール表出が含意していること、集団への包摂と排除の意識が作用していること、他者との認識のずれを顕在化させる方略が示されていること、ずれへの不快感を埋めるための方略があり、これらは施設文化に応じて表出の度合いが異なることが示された。また、保育者は、幼児の同調性や同調行為を有効に機能させる工夫として、目的共有、対話、協働という三要素を土台に問題解決に向かう中で、子どものウェルビーイングを模索する視点が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまであまり検討されてこなかった幼児集団の同調性に関して、保育集団内で表出する幼児の言動表出を検討するとともに、同調性に対して保育者が持つ意識について検討した。第一の意義は、エスノグラフィの手法を用いて幼児間の同時多発的かつ複雑なやりとりを微視的に分析し、幼児間の同調性の特徴を示した点である。第二の意義は、幼児の同調性の生成機序には園文化の違いや見られることを示した点である。第三の意義は、保育者が集団形成に際して同調性の有用さを意識的に取り入れる構えがあることを示した点である。これら三点から、幼児の同調性研究に一つの視座を提供したといえる。

研究成果の概要（英文）：To investigate the mechanism of the generation of conformity relationships within early child groups, we conducted an observation survey of 21 classes of 3- to 5-year-old children at five preschools and interviews with early teachers. The results showed that the characteristics of the conformity relationship among young children include: the implication of various rules expressed by the young children, the effect of a sense of inclusion and exclusion in their groups, ways to expose gaps in perception with others, and strategies to fill discomfort with each gap. These characteristics showed to vary in degree of expression depending on the culture of these institutions. In addition, as a device for making child's conformity and behavior function effectively, early teachers were presented with a perspective of seeking child's well-being as they work to solve problems based on the three elements of shared purpose, dialogue, and collaboration.

研究分野：保育学

キーワード：同調性 生成機序 幼児 集団 文化 質的研究 エスノグラフィ

1. 研究開始当初の背景

人は社会における関係の中で知的・身体的・社会的な発達を拡大し、深化し、再構成していく。つまり、人は関係性の中で育つ存在であると言える。保育においても、集団内でのやり取りを通じた幼児の関係形成の重要性が指摘されている。その中でも、幼児期は自他の意識の萌芽期であるとともに、集団の中で自己の表出と抑制を経験することで自己調整機能を育む時期であるゆえ、これら幼児の発達を支え促す保育者の役割は重要である。

幼児が学び育つ過程に見られる認知や概念的な構造が幼児同士の社会的な関わりの中で形成される際の複雑な文脈を追跡する手立てとして、「同調性」という観点がある。幼児の同調性においては、[保育者 - 幼児間]の関係性の中で多くの検討がなされてきた。例えば、結城(1998)は、保育者が行なうクラス運営の中で幼児が集団を理解していく過程においては、保育者が子ども全体にクラス名で話す「集団呼称」が幼児間の同調性を引き出していることを指摘して、日本の集団保育に根差した文化性を明らかにしている。一方で、砂上(2012)は、自由遊び内の幼児同士のやりとりにおける同調性を対象にして、遊び場面での幼児同士の同調性の表出過程を「身体模倣」、「場の共有」、「物の共有」、「発話」の観点から検討し、少人数の集団に見られる幼児の同調性の特性を明らかにしている。しかし、クラス規模の保育集団の中で同時多発的に発生する幼児間のやりとりを徹視的に捉えるといった、保育集団内の幼児間の同調性の表出については、記録することが困難であるため検討自体が少ない。

幼児期の子どもは、他者との関係を深めていく中で協同性を育てていくが、「協同」するからこそ「同調」にも出会う時期だと考えられる。この時期に育まれる「同調」という作用がクラス規模の保育集団の中でどのように表出するのか、また施設ごとに持つ文化が保育集団内で幼児の「同調」の表出に差異を与えるのか、という点に迫ることが本研究を行なう初発である。

2. 研究の目的

上記の幼児期における同調性の表出場面に関する研究の背景を踏まえ、本研究は、保育集団内に生じる幼児間の同調性について、エスノグラフィーの手法を用いて、保育集団の文化性と幼児間の言動様式の関連を検討し、幼児間の同調性の生成機序を解明することを目的とする。

具体的には、(1)同調性を生み出す施設形態の文化性の違いを捉えること、(2)保育集団内の活動別にみられる幼児間の同調性の表出の違いを検討すること、という二点から幼児が表出する同調性の過程を徹視的に検討する。また、幼児期は幼児の育ちを支える保育者の役割もまた重要であることを鑑みて、幼児の育ちを支える保育者は同調をどのように捉え、また保育集団の中で扱っているのかについても聞き取り調査を通して検討する。

3. 研究の方法

本調査は、保育集団内に生じる幼児間の同調性について、幼児の表出と保育者の意識や関わり の観点から検討するために、以下の調査を行なった。

研究1 同調性に関するテキスト分析(2020-2021年度)

研究1では、集団行動、集団心理、集団形成に関するテキストにおいて、同調性を集団意識の要素として捉え、個人の発達論や集団の関係論の観点から同調性の意義や役割についてどのように取り上げられているのかについて検討した。

研究2 保育集団内に見られる幼児間の同調性に関する分析(2020-2022年度)

研究2では、幼児の同調反応や同調行動を明らかにするために、保育現象に立ち現れる幼児の行動の意味を徹視的に検討する参与観察を中心とした質的研究法を採用した。A県B市5園(幼稚園2園、保育園1園、認定こども園[幼稚園型1園、保育園型1園])に協力を得た。

研究3 幼児の同調性の表出及び集団内での扱いに対する保育者の意識の分析(2020-2022年度)

研究3では、幼児の同調反応や同調行動に対する保育者の意識、また保育集団内での幼児の同調行動の扱いについて、インタビュー調査を実施した。A県B市4園(幼稚園2園、認定こども園[幼稚園型1園、保育園型1園])、C県D市1園(認定こども園1園)に協力を得た。

4. 研究成果

研究1 同調性に関するテキスト分析(2020-2022年度)

自己形成における自他関係には西洋型、東洋型といった文化間差があること(Markus and Kitayama, 1991) また個人特性の違いには個人主義文化、集団主義文化といった文化性に依じて同調傾向に違いがあること(Triandis, 1995; 辻川, 2020) 葛藤の扱いにも「自己への関心の程度」と「他者への関心の程度」の違いに応じて表出が異なり、社会的要因が関与することで同調行為も表出すること(Thomas and Kilmann, 2002) などの記述が見られた。特に、個人の人格形成や社会との関係の中でそれぞれに形成される同調意識があることが示唆された。

研究2 保育集団内に見られる幼児間の同調性に関する分析(2020-2022年度)

幼児の同調反応や同調行動には、《互酬の関係》、《長幼の序列》、《共通の時間意識》、《順序性の重視》という4つの同調表現を示す特徴を明らかにした。また、4つの同調表現に基づく事例の質的検討では、幼児期からすでに仲間を主要な社会的参照集団として位置づけながら、同調反応や同調行動を表出して関わり合う姿があることを確認した。その中で、幼児が集団の中で生成される見方や考え方といった多数派の文脈への包摂と排除を意識的また無意識的に行っていることが示唆された。これらの知見を踏まえると、幼児がとる同調反応や同調行動は、ある前提に基づいた意識的な場面/感情受容である“明示的な共感”と、無意識的かつ感覚的に当然視する場面/感情受容である“暗黙的な共感”が幼児の同調行動を規定していることが考えられる。また、同調を決定づける4つの重要な要因には、自他の育ちや関係性、共有する対象、同質的な前提となる園文化(文化性) その状況下での子ども自身の不可視的な目標があると考えられる。

次に、4歳児の継続的な表出の変容を検討した結果、同調機能と自己調整機能の関連が示唆された。具体的には、同調機能の生成・変容過程では、仲間の視点が自身のとるべき行為の判断基準になっていたことから、4歳児期からすでにクラス集団が社会的に参照すべきものとして位置付けられていることが考えられる。また、自己調整機能の生成・変容過程では、自己主張が前面に出ている段階から次第に集団の中で自己抑制がみられるようになっていくといった段階へと自己表出の容態が変化していく過程を導出した。ただし、4歳児の表出過程においてその展開は多様な筋道があることが分かった。これら二つの機能は、幼児が操作性を持つことや対象との関係性を組み換えていく機会と教師が対象理解を深め遊びや活動を組織していくことが大切であり、二機能は、幼児、対象、活動の展開といった多様な要因によって相互に影響を及ぼし合うことが明らかになった。

研究3 幼児の同調性の表出及び集団内での扱いに対する保育者の意識の分析(2020-2022年度)

幼児が示す同調性や同調行為について、保育者は、より良いクラス集団を作っていくために同調性や同調行為を有効に機能させていた。特に、有効に機能させる工夫として、(1)目的や意味の共有、(2)対話、(3)協働という要素を大切にしていた。また、三つの要素を土台にして(4)問題解決に向かう組織づくりに注力している視点も見られた。その上で、子どもたちが関係性の中で(5)より良い育ち(ウェルビーイング)に向かっていくような、長期的な視座を持って日々の保育に取り組んでいく展望を持っていることが示された。

特に、(1)目的や意味の共有では、意欲を促す同調を大切に、幼児同士の内発的動機づけに働きかける側面や他児とのやりとりのなかで自己内省察を通した内在化の過程を大切に保育者の意識が示された。(2)対話では、多数決を含めた合意形成過程において、他児への同調が集団知の方向づけになるという可能性を大切に保育者の視点が示された。(3)協働では、他児の提案や気づきをその場の同調だけで止めるのではなく、皆でやってみるといった行動に移すことで視点の違う自他が交わり合うことの面白さを大切にするといったように、同調を視点の拡張に繋げる配慮をしていた。一方で、保育者が合意形成を急ぎすぎること逆方向の意見が子どもたちから提示された際に受容するだけで流してしまうことがあるといった面もあり、保育者自身が表面上の同調をするだけの閉じた思考に陥らないように意識するといった視点もまた提示された。(4)問題解決に向かう組織づくりでは、限りある時間の中で子どもたちが同調で流れるのではなく、同調をきっかけに少しでも立ち止まって考える機会となるように、優先順位、限界を図ること、時程規則を見通した活動内容の構成に関する視点が示された。(5)より良い育ち(ウェルビーイング)では、同調行為自体が悪いものであるとするのではなく、同調が他者の視点に立つ機会にもなれば共感性といった目を育むことになるため、子どものより良い育ちを促す観点もあることに目を配る視点を忘れないようにする必要があるといった専門的視座が示された。

以上、本研究を通して、「幼児間の同調性の生成機序」における幼児の特徴、保育の文化性、保育者の専門性のそれぞれに関して新たな視座を提示できたと言える。引き続き、幼児期における同調性の機序が児童期にどのように変容していくのかを検討していくこととする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 宮本雄太, 金剛智恵子, 村橋義人	4. 巻 47
2. 論文標題 遊び場面における幼稚園4歳児の自己調整機能と同調機能の関連- “ ごっこ遊び ” や “ 生き物 ” の事例に着目して-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福井大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 51-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松田早織, 岡山佳耶, 宮本雄太	4. 巻 46
2. 論文標題 幼稚園入園児の居場所づくりと遊びの組織化の関係 - “ 見立て遊び ” や “ 生き物探し ” の事例に着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福井大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮本雄太	4. 巻 6
2. 論文標題 保育集団内の幼児の同調反応や同調行動の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福井大学教育・人文社会系部門紀要	6. 最初と最後の頁 259-276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮本雄太	4. 巻 5巻
2. 論文標題 保育におけるケア行為の検討 - 幼児のケア行為の特徴や表出の関連に着目して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福井大学教育・人文社会系部門紀要	6. 最初と最後の頁 173-192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 宮本雄太
2. 発表標題 幼児は絵本を通して同質であることをどのように語るのか
3. 学会等名 日本子ども社会学会第27回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮本雄太
2. 発表標題 保育集団内の同調反応や同調行動
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuta Miyamoto, Mai Kishino
2. 発表標題 Exploring Professionals of Early Childhood Education and Care: Based on Reflections and Episodic Descriptions
3. 学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA) Annual Conference 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

保育者向けパンフレット
宮本雄太（2022）「幼児期に示す同調行動 - 同調性から考える幼児の社会的行動 - 」, 1-8.

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 EECC研究会_日中韓おしゃべり会	開催年 2021年～2022年
-----------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------